

## 目標に対する期待と心理的適応の関連性

杉 山 成

個人の未来に対する目標や希望の様相，すなわち未来展望 (future time perspective) の関連要因には，社会経済的地位をはじめとさまざまなものが検討されているが，杉山 (1993; 1994) は，そのなかでも目標に対する成果獲得の期待 (expectancies) がこうした未来展望の構成において中心的な役割を持つと推測し，自己への期待に関する認知的概念である「統制感 (perceived control)」と未来展望との関連を実験と調査によって検討した。その結果，実験操作によって統制感を低下させられた被験者の未来展望は，そうした操作を受けなかった被験者に比して，よりネガティブに変化することが見いだされた。また，パーソナリティとしての一般的統制感の高い個人が，低い個人に比して，より未来志向的であり，未来に対するポジティブな態度を持つということが確認され，両者の密接な関連が示唆された。

さらに，こうした期待という認知機能が古くから行動の重要な規定因であることが示唆されていることから，杉山 (1995) は，Atkinson (1964) の期待—価値モデル，Raynor (1970) の未来志向モデル，そして Vroom (1964) の EIV モデル等の動機づけ理論に基づいて，未来展望の現在への影響過程を考察した。そして，目標の実現可能性の評価である「個人的目標の遂行期待」，目標と未来の成果との結びつきに関する「個人的目標の道具性期待」，個人的未来に対する誘意性を反映する「個人的未来に対する時間的態度」という3つの認知要因によって未来展望の行動調整効果をとらえるモデルを提示している。これらの要因が満たされる場合，目標実現のための行動が動機づけられ，現在の行動が目標志向的に調整されるために，生活における充実感やモラルが促進されると推測される。

本研究ではこうした枠組みに基づいて，個人的目標に纏わる認知要因と現

在の感情や行動の関わりを、青年期の被験者を対象に調査し、未来展望の行動調整効果についての検討を行うこととする。

## 研究1 目標意識構造の分析

研究1では、青年期の個人における目標に対する意識構造を検討し、同時にそれを測定するための尺度を構成する。

### 方法

**被験者** 大学生213名(男性114名,女性99名)。

#### 質問紙の構成

(1) **尺度の構成** 個人の目標に対する意識の構造を検討するために、次のような手続きによって項目を収集した。まず、モデルの検討に必要な①目標に対する遂行期待に関する項目、そして②その目標と未来の成功との道具的な関連に関する道具性期待に関する項目を用意し、また、その他に個人的目標の先行諸研究でその主要な次元として検討されている③目標の有無、④目標の重要性の認知、⑤目標の現実性(reality)、⑥目標達成の内的統制性、⑦目標設定の自律性、⑧目標へのはたらきかけ、⑨目標の具体性、⑩目標獲得の渴望、⑪目標を持つことの拒否、⑫目標の時間的遠近、⑬目標の接近可能性(accessibility)、⑭目標達成への欲求という次元にそれぞれ4～5項目ずつ、およびそれらに分類できない項目を併せて、合計80個の項目を設定した。項目の一部は、Gjesme (1979)、勝俣・篠原・村上 (1982)、角野 (1993)、都筑 (1993)、白井 (1994)、落合 (1980)、杉山 (1994) で用いられている目標に関する項目や表現から選出し、一部は自作した。評定は「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの6件法で行った。

(2) **妥当性の検討** また、妥当性検討のために上記の被験者のうち99名に自我同一性地位判別尺度(加藤, 1983)、26名にイベントテストを同時に実施した。イベントテストでは、「未来に達成しようと思う目標」を重要な順に3個自由記述で回答させ、それぞれの出来事に関して、それが起こる年齢を回答

させた。同時に、それぞれの出来事が起こる主観的確率（以下「確率性」と呼ぶ）を一つずつ 1～100%の範囲で回答させ、また、それらの未来の成功との関連の程度（以下「関連性」）、および当該の目標のための現在の準備の程度（以下「準備性」）について一つずつ4件法によって評定させた。

**調査手続き** 心理学の授業中に質問紙を配布し、回答させた。

## 結果と考察

目標意識に関する80項目の項目平均と項目標準偏差を算出した後、因子分析を行った。主因子法により因子を抽出した結果、固有値が1.0以上の因子は第7因子までであり、また第8因子以降の固有値が急激な減少を示すことから、因子の数として7因子を指定した。そして、バリマックス回転を施し、その結果に基づき、2つ以上の因子に高い寄与を持つ項目や共通性の低い項目を削除するなど、項目の精選を行った。こうした手続きを繰り返し、最終的にTABLE.1に示すような41項目による因子パターンが得られた。因子負荷量は、40以上の値が記されている。

まず、第1因子には、目標に関する道具性尺度として設定した項目に目標の有無や目標の具体性の項目の一部が加わったものであり、目標に対して道具的価値を認知し、未来の成功・失敗という結果と結びつけているかどうかという側面である。それゆえ、この因子は「目標の道具性の認知」を意味するものであると考えられる。次に、第2因子はすべて目標への遂行期待として設定した項目で構成されており、自分の目標を達成できるという高い可能性を示す「目標達成の期待」の因子であると考えられる。第3因子は、目標へのはたらきかけ、目標達成への欲求として設定した項目で構成されており、「目標へのとりくみ」に関する因子であると解釈される。第4因子は多少複合的な内容を含んでいるが、目標の有無や目標の重要性の認知、そして目標獲得への欲求として設定した項目がまとまったものである。この因子は、目標を持つということ一般に対して、それを重要であると考えているかどうか、また、そうした状態を望んでいるかどうかという内容であるため、「目標の保

TABLE. 1 目標意識の因子分析（バリマックス回転後）

| No. | 項 目                                 | 因 子  |      |      |      |     |      |     | h <sup>2</sup> |
|-----|-------------------------------------|------|------|------|------|-----|------|-----|----------------|
|     |                                     | I    | II   | III  | IV   | V   | VI   | VII |                |
|     | 将来の成功のために何をすればいいのかわ解している            | .70  |      |      |      |     |      |     | .65            |
|     | 特定の職業への就職、資格の取得など具体的な目標を持っている       | .68  |      |      |      |     |      |     | .61            |
|     | 私の将来計画は具体的ではない                      | -.66 | -.47 |      |      |     |      |     | .72            |
|     | 私にはだいたいの将来計画がある                     | .66  |      |      |      |     |      |     | .68            |
|     | 将来のために考えて今から準備していることがある             | .65  |      |      |      |     |      |     | .66            |
|     | 私が現在抱えている目標は、将来の成功・幸福のための重要なステップである | .65  |      |      |      |     |      |     | .63            |
|     | 今持っている目標が達成できれば、未来に成功を収めることができる     | .62  |      |      |      |     |      |     | .50            |
|     | 自分の今うちこんでいることが、自分の将来に影響する           | .58  |      |      |      |     |      |     | .44            |
|     | 私の目標は、将来の成功につながるものである               | .54  |      |      |      |     |      |     | .52            |
|     | 私の将来は漠然としていてつかみどころがない               | -.53 | -.46 |      |      |     |      |     | .68            |
|     | 私が自分の目標をうまく達成できる可能性はとても高い           | .72  |      |      |      |     |      |     | .61            |
|     | 私は将来、自分の目標を実現できないのではないかと思う          | -.66 |      |      |      |     |      |     | .59            |
|     | 目標が達成できるかどうか不安になることがある              | -.66 |      |      |      |     |      |     | .50            |
|     | 自分の目標の達成に自信を持っている                   | .61  |      |      |      |     |      |     | .62            |
|     | 私は実現可能な目標を持っている                     | .46  | .58  |      |      |     |      |     | .58            |
|     | 私は目標を達成するだけの力を持っている                 | .57  |      |      |      |     |      |     | .57            |
|     | とてもかなえられないような目標しか持っていない             | -.49 |      |      |      |     | .44  |     | .52            |
|     | 目標実現のために今できるだけ努力している                | .43  |      | .69  |      |     |      |     | .75            |
|     | 自分の目標に積極的にとりこんでいる                   | .46  |      | .62  |      |     |      |     | .77            |
|     | 私は計画を立てるのではなく、成りゆきまかせて進めている         |      |      | -.61 |      |     |      |     | .64            |
|     | 進学や就職のことを考えて真剣に努力している               |      |      | .59  |      |     |      |     | .58            |
|     | 私には特にうちこむものがない                      |      |      | -.53 |      |     |      |     | .58            |
|     | どんな障害があっても目標の達成をあきらめない              |      |      | .43  |      | .46 |      |     | .56            |
|     | 私は自分の将来計画を持ちたい                      |      |      |      | .72  |     |      |     | .60            |
|     | 人生を意味あるものにするためには目標を持たなければならない       |      |      |      | .67  |     |      |     | .60            |
|     | 将来のことを考えて計画的に行動できるようになりたいと思う        |      |      |      | .62  |     |      |     | .48            |
|     | あまり先の未来を考えても意味がない                   |      |      |      | -.58 |     |      |     | .52            |
|     | 私は自分なりの人生目標がほしい                     |      |      |      | .57  |     |      |     | .53            |
|     | 無理に目標を持つ必要はない                       |      |      |      | -.56 |     |      |     | .53            |
|     | 私には自分が今どう感じるかが大切で、将来のことはあまり大切ではない   |      |      |      | -.56 |     |      |     | .58            |
|     | 将来に目標を持ったり、想像したりすることは大切だ            |      |      |      | .53  | .42 |      |     | .58            |
|     | 自分の目標のために努力するのは楽しいことだ               |      |      |      |      | .71 |      |     | .59            |
|     | 自分にとって大切な目標を決めたらそれに向かって行動する         |      |      |      |      | .61 |      |     | .51            |
|     | 自分の将来は自分で切り開く自信がある                  |      |      | .43  |      | .56 |      |     | .60            |
|     | 夢や希望が大きければ大きいほどいい                   |      |      |      |      | .54 |      |     | .48            |
|     | 目標が達成されるかどうかは努力や能力とはあまり関係ないと思う      |      |      |      |      |     | .65  |     | .51            |
|     | 私は努力をすれば目標を達成できると思う                 |      |      |      |      |     | -.56 |     | .59            |
|     | 努力しなくても自分の将来は何とかなると思う               |      |      |      |      |     | .53  |     | .52            |
|     | 一生の仕事についてたびたび志をかえた                  |      |      |      |      |     |      | .78 | .62            |
|     | 私は簡単に物事をあきらめてしまう                    |      |      |      |      |     | -.41 |     | .57            |
|     | 実現しそうなことばかり考える                      |      |      |      |      |     |      |     | .69            |
|     |                                     |      |      |      |      |     |      |     | .41            |
|     |                                     |      |      |      |      |     |      |     | .53            |
|     | 寄与率 (%)                             | 31.3 | 7.5  | 5.5  | 4.6  | 4.0 | 3.5  | 2.6 |                |

注) 因子負荷量は、40 以上を掲載した。

持に対する建設的態度」と名づけることができるであろう。第5因子は自身の目標に対する態度であり、それを行動の指針として受け入れているかどうかという側面である。それゆえ「目標の受容」と命名した。第6因子は、目

標の達成を目指す際に自身の内的な特性（努力や能力）に期待するのか、それともそれらでは達成し得ないと考えているのかという信念の違いに関する項目であり、「目標達成の内的統制感」と解釈される。最後の第7因子は、目標へとはたらきかけや目標の具体性として設定した項目から目標設定の安定—不安定性を示すものがまとまったものであり、「目標設定の安定性」と命名した。

こうした因子分析の結果に基づいて、それぞれの因子名に沿うような方向に得点の方向をそろえ、該当する項目の得点の合計を求めることによって下位尺度を構成した。なお、第3下位尺度「目標へのとりくみ」に含めた「どんな障害があっても目標の達成をあきらめない」という項目が最も高い因子負荷量を示すのは、第5下位尺度「目標の受容」に対してであるが、意味内容から考察して、2番目に高い負荷を示す第3尺度に含めることとした。

各下位尺度のとりうる得点の範囲は、順に第1下位尺度が10—60点、第2下位尺度が7—42点、第3下位尺度が6—36点、第4下位尺度が8—48点、第5下位尺度が4—24点、第6下位尺度が3—18点、第7下位尺度が3—18点であり、平均得点、標準偏差、 $\alpha$ 係数はTABLE. 2に示す通りであった。第1下位尺度から第5下位尺度までの $\alpha$ 係数は尺度の十分な内的整合性を示している。一方、第6、および第7下位尺度に関してはやや値が低いが、これは主に項目の数の少なさによるものと考えられる。なお、それぞれの下

TABLE. 2 下位尺度の平均、標準偏差、および $\alpha$ 係数

|                | <i>M</i> | <i>SD</i> | $\alpha$ 係数 |
|----------------|----------|-----------|-------------|
| I 目標の道具性認知     | 39.46    | 10.32     | .90         |
| II 目標達成の期待     | 25.04    | 5.52      | .81         |
| III 目標へのとりくみ   | 22.30    | 6.11      | .88         |
| IV 目標に対する建設的態度 | 37.23    | 6.09      | .80         |
| V 目標の受容        | 16.85    | 3.38      | .70         |
| VI 目標達成の内的統制感  | 13.62    | 2.65      | .56         |
| VII 目標設定の安定性   | 10.25    | 2.84      | .54         |

位尺度における男女差を検討したところ、7つの下位尺度のいずれにおいても有意な男女差は確認されなかった。第2研究においては、特に第1因子の下位尺度を「目標道具性期待尺度」、第2因子の下位尺度に関しては「目標遂行期待尺度」と命名し、この2つの下位尺度をまとめて「目標期待尺度」として用いる<sup>1)</sup>。

つぎに、妥当性などを検討するために実施した尺度との相関を算出した。TABLE. 3は自我同一性判別尺度の各下位得点、合計得点との相関係数を示している。この結果、自我同一性の合計得点と目標意識のすべての下位尺度との間に有意な正の相関が認められた。Erikson, E. H. の自我同一性の理論では、現在が過去に根ざし、過去の上に現在の自分が確実に築き上げられているというような自我同一性の意識と確信の上に、人生目標をはじめとする個人の未来というものがはっきりと具体性を持って現実的なものとなることが論じられている (Erikson, 1959)。本研究の結果は、この見解と一致し、自我同一性のレベルの高い個人の目標に対する意識が低い個人に比して高い

TABLE. 3 目標意識尺度と自我同一性尺度の相関

|              | 目標意識に関する下位尺度 |       |       |       |       |       |       |
|--------------|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|              | I            | II    | III   | IV    | V     | VI    | VII   |
| 自我同一性 (n=99) |              |       |       |       |       |       |       |
| 現在投入         | .83**        | .65** | .79** | .49** | .60** | .39** | .45** |
| 過去危機         | .21          | .09   | .16   | .26*  | .34** | .25*  | -.14  |
| 将来希求         | .64**        | .49** | .64** | .58** | .65** | .32** | .38** |
| 全 体          | .73**        | .54** | .70** | .56** | .68** | .41** | .32** |

注) +  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

1) この目標期待尺度の再検査信頼性を確認するため、3週間後に被験者のうち、62名に再検査を実施した。その結果、道具性尺度では、 $r = .76$  ( $p < .01$ )、遂行期待尺度では、 $r = .71$  ( $p < .01$ ) という高い再検査信頼性が得られ、尺度の安定性が確認された。

TABLE. 4 目標意識尺度とイベントテストの属性の相関 (n=26)

|                 | 目標意識に関する下位尺度 |       |       |      |      |      |      |
|-----------------|--------------|-------|-------|------|------|------|------|
|                 | I            | II    | III   | IV   | V    | VI   | VII  |
| イベントテストによる「関連性」 |              |       |       |      |      |      |      |
| 1 番目に重要な目標      | .62**        | -.13  | .37   | .30  | .20  | .20  | -.13 |
| 2 番目に重要な目標      | .54*         | .11   | .15   | -.11 | .06  | .10  | -.26 |
| 3 番目に重要な目標      | .47*         | .18   | .10   | -.17 | .21  | .16  | -.27 |
| イベントテストによる「確率性」 |              |       |       |      |      |      |      |
| 1 番目に重要な目標      | .02          | .68** | .36   | -.11 | .14  | .41  | .49* |
| 2 番目に重要な目標      | .12          | .53*  | .30   | -.22 | .13  | .38  | .26  |
| 3 番目に重要な目標      | .34          | .48*  | .30   | -.01 | .42  | .24  | .07  |
| イベントテストによる「準備性」 |              |       |       |      |      |      |      |
| 1 番目に重要な目標      | .58**        | .30   | .65** | .36  | .15  | .38  | .37  |
| 2 番目に重要な目標      | .08          | .36   | .48*  | .04  | -.01 | .37  | .20  |
| 3 番目に重要な目標      | .12          | .20   | .33   | -.12 | .14  | -.24 | .21  |

注) +  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

ということを示しており、本尺度の妥当性を示すものといえる。

また、目標期待尺度の2つの下位尺度とイベントテストによって測定した目標の確率性、関連性との関連はTABLE. 4のようになった。これをみると特に1番重要な目標に対する属性との対応が顕著である。そして、道具性尺度とイベントテストにおける目標達成の確率性、遂行期待尺度とイベントテストにおける目標の関連性というように、目標期待尺度とイベントテストとの諸属性との間に予想される対応関係が確認され、目標期待尺度のイベントテストとの間の基準関連妥当性が示された。

## 研究2 目標期待と現在の適応の関連性の分析

研究1では、個人の目標に対する意識の分析を行い、目標に対する期待が、その未来の成功への道具性期待と、それ自体の遂行期待という2つの因子として抽出された。そしてその結果に基づいて、それらを目標期待尺度として構成し、信頼性および妥当性を確認した。

研究2では、目標期待尺度を用いて、その心理学的意味を検討する。前述のモデルから考慮すると、目標に関する高い道具性期待と遂行期待は、それぞれの単独の影響性や相互作用を通して、現在の行動を目標志向的な方向に誘導する働きを持ち、結果的に個人に心理的・社会的適応をもたらすと予測される。

## 方法

**被験者** 大学生 54 名 (男性 15 名, 女性 39 名)。

**質問紙の構成** 未来展望の尺度としては、目標期待尺度 (目標遂行期待尺度, 目標道具性期待尺度) の 17 項目を 6 件法, および未来に対する態度を測定する 25 項目 (杉山, 1993) を 5 件法によって実施した。各尺度のとりうる得点の範囲は、目標遂行期待尺度で 7-42 点, 目標道具性期待尺度で 10-60 点, 未来に対する態度尺度で 25-125 点となる。

YG 性格検査 (一般用) は、120 問の質問項目から成っており、次の 12 の性格特性を測定する。D・抑うつ性, C・回帰性傾向, I・劣等感, N・神経質, O・客観性の欠如, Co・協調性の欠如, Ag・愛想の悪さ, G・一般的活動性, R・のんきさ, T・思考的外向, A・支配性, S・社会的外向。

**調査手続き** 心理学の授業中に質問紙を配布し、回答させた。

## 結果と考察

本研究の被験者における目標期待尺度の平均と標準偏差は、目標遂行期待尺度で 27.35 (SD 6.12), 目標道具性期待尺度では 41.57 (SD 10.03) となり、 $\alpha$  係数はそれぞれ  $\alpha = .84$ ,  $\alpha = .90$  となった。いずれも十分な内的整合性が認められる。未来に対する態度に関しても  $\alpha$  係数は  $\alpha = .92$  と高い値を示した。平均値は 81.05 (SD 14.25) であった。

そこで、目標期待尺度と YG 性格検査の 12 の下位尺度の間の相関係数を算出した (TABLE. 5)。その結果、YG 性格検査における適応性の各側面と道具性期待、遂行期待の両目標期待尺度との間に多くの有意な相関関係が確



TABLE. 5 目標期待尺度と YG テスト下位尺度の相関

|          | 目標期待尺度 |       |
|----------|--------|-------|
|          | 遂行期待   | 道具性期待 |
| S 社会的外向  | .44**  | .55** |
| A 支配性    | .43**  | .44** |
| T 思考的外向  | .23    | -.10  |
| R のんきさ   | .26    | .28   |
| G 一般的活動性 | .34    | .48** |
| Ag 愛想の悪さ | .26    | .35*  |
| Co 非協調的  | -.46** | -.38* |
| O 非客観性   | -.19   | -.13  |
| N 神経質    | -.43** | -.33* |
| I 劣等感強   | -.44** | -.32* |
| C 回帰性傾向  | -.12   | -.01  |
| D 抑うつ性   | -.57** | -.27  |

注) +  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

認められた。両尺度に共通して関連のみられたものに、社会的外向、支配性、非協調性、神経質、劣等感強といった尺度があり、前2尺度との間には正の相関、後の3尺度との間には負の関連がみられた。また、TABLE. 6の偏相関係数に基づき両尺度の差異に注目すると、道具性期待と関連の深い特性は、社会的外向、支配性、活動性、攻撃性（愛想の悪さ）などの行動や思考における主体性や積極性に関わる心理特性であるのに対し、遂行期待の方は劣等感、神経質、抑うつ性尺度との相関係数が高く、自己への自信—不安や心理的健康に関わる心理特性との関わりが高いことを読みとることができる。

次に、目標期待の2尺度のそれぞれの平均値の高低に基づく4群(LL群；遂行期待が低群〈26点未満〉、道具性期待が低群〈44点未満〉)の18名、LH群；遂行期待では低群、道具性期待では高群〈44点以上〉)に属する7名、HL群；遂行期待では高群〈26点以上〉、道具性期待では低群に属する9名、HH群は遂行期待、道具性期待共に高群に属する20名で構成)におけるYG性格検査の下位尺度得点を算出し、それらを従属変数とした一元配置の分散分析、

TABLE. 6 目標期待尺度と YG テスト下位尺度の偏相関

|          | 目標期待尺度  |        |
|----------|---------|--------|
|          | 遂行期待    | 道具性期待  |
| S 社会的外向  | .20+    | .41* * |
| A 支配性    | .26*    | .27*   |
| T 思考的外向  | .16     | -.09   |
| R のんきさ   | .13     | .17    |
| G 一般的活動性 | .19+    | .31*   |
| Ag 愛想の悪さ | .10     | .23*   |
| Co 非協動的  | -.33* * | -.16   |
| O 非客観性   | -.14    | -.03   |
| N 神経質    | -.31* * | -.13   |
| I 劣等感強   | -.33* * | -.10   |
| C 回帰性傾向  | -.13    | -.06   |
| D 抑うつ性   | -.52* * | -.06   |

注1) 目標期待の他方の尺度を統制して、目標期待の2尺度とYGの12尺度の偏相関係数を算出した。

注2) +  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \* \*  $p < .01$

およびLSD法による多重比較(5%水準)を試みた(TABLE. 7)。その結果、4群の主効果が有意になったのは社会的外向、支配性、のんきさ、一般的活動性、愛想の悪さ、抑うつ性の各下位尺度であり、社会的外向、支配性、のんきさ、一般的活動性という適応性の尺度に関してはHH群が他のいずれかの群に比して有意に高い平均値を示し、愛想の悪さ、抑うつ性という不適応尺度においては逆に低い平均値を示していた。なお、思考的外向、非協動的、神経質、劣等感強に関しては傾向差が確認されたが、それらの多重比較においても同様にHH群が他のいずれかの群に比して思考的外向の傾向が強く、一方、非協調性や神経質、劣等感の傾向は低いことが示されている。この点に関して、近年のBandura, A.の自己効力感理論では、行動の先行要因として、ある行動がどんな結果を引き起こすかという結果期待と、適切な行動をうまくとれるかどうかという効力期待をとらえ、この2つの期待は異なる心理的効果をもたらすとして、両者の相互作用を仮定している(Bandura,

TABLE. 7 目標期待尺度による類型の YG テストの比較

|    |        | 1. LL     | 2. LH     | 3. HL     | 4. HH     | 多重比較の結果 |             |
|----|--------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|-------------|
| S  | 社会的外向  | 11.5(5.4) | 16.0(2.1) | 13.1(5.1) | 16.0(3.4) | 4.16**  | 1 < 4       |
| A  | 支配性    | 9.6(4.4)  | 12.0(3.1) | 10.8(5.5) | 13.5(4.3) | 2.91*   | 1 < 4       |
| T  | 思考的外向  | 9.2(3.5)  | 4.5(2.3)  | 10.0(4.3) | 9.6(4.1)  | 2.19+   | 2 < 1, 4, 3 |
| R  | のんきさ   | 10.7(3.2) | 16.0(2.9) | 14.1(4.3) | 13.6(2.6) | 5.39**  | 1 < 4, 3, 2 |
| G  | 一般的活動性 | 9.0(4.6)  | 13.5(1.2) | 12.5(3.5) | 13.9(4.4) | 5.01**  | 1 < 4       |
| Ag | 愛想の悪さ  | 10.3(3.6) | 15.0(5.2) | 14.0(3.8) | 13.7(3.1) | 4.46**  | 1 < 4, 3, 2 |
| Co | 非協調的   | 9.0(3.1)  | 7.0(3.1)  | 7.3(2.7)  | 6.3(3.3)  | 2.68+   | 4 < 1       |
| O  | 非客観性   | 10.7(4.2) | 11.2(2.2) | 8.5(4.7)  | 9.7(3.7)  | 0.68    |             |
| N  | 神経質    | 11.4(3.6) | 9.0(4.9)  | 10.5(5.4) | 7.8(4.9)  | 2.45+   | 4 < 1       |
| I  | 劣等感強   | 10.8(4.3) | 8.5(4.0)  | 7.3(6.6)  | 7.0(4.9)  | 2.35+   | 4 < 1       |
| C  | 回帰性傾向  | 10.7(4.8) | 11.5(4.5) | 10.3(4.2) | 10.8(3.8) | 0.05    |             |
| D  | 抑うつ性   | 13.5(4.1) | 14.0(4.5) | 9.6(6.3)  | 8.7(4.9)  | 4.33**  | 4 < 1, 2    |

注) +  $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

1985)。すなわち、両期待が共に高い場合、自信に満ちた能動的な行為が促進されるのであるが、結果期待が高いにも関わらず効力期待が低い場合には、個人に劣等感や自尊心の低下をもたらす。逆に効力期待が高いにも関わらず結果期待が低い場合には、不平や不満の感情を生む。さらに両期待ともに低い場合には、個人は成果の獲得を断念し、無気力や抑うつ状態に陥るとされる。この概念を個人的目標達成へ向けての期待という枠組みでとらえると、本研究における遂行期待と道具性期待とかなり近接した概念となるであろう<sup>2)</sup>。そして、本研究で得られた結果においても、上述のように目標に対する

2) 結果期待とは、本来、所与の行動がある結果に至るであろうという、その個人の査定 (Bandura, 1977) として定義される。それゆえ、ある特定の行為が第二次の結果をもたらす主観的確率 (Vroom, 1964) という道具性の概念とは若干の相違は存在する。

しかし、近年、自己効力感理論を実証しようとする試みのなかで、効力期待と結果期待を独立的に扱うことが難しいことから、結果期待という概念の独立性を主張するためには、それを成功を得るための手段的な行動に関する期待として定義するべきであるという主張がなされている (竹綱・鎌原・沢崎, 1988)。こうした定義はかなり本研究における道具性の概念と近いといえよう。

道具性期待と遂行期待の両方の得点の高い HH 群の個人の心理的適応の程度は高いものであった。一方、自己の目標と将来との結びつきを感じておらず、さらに目標を達成し得るという期待も低い LL 群は、他の 3 群に位置する個人に比して高い抑うつ性や低い自己評価を示していた。すなわち、これらの傾向は自己効力感理論における効力期待と結果期待の枠組みと一致するものであったといえる。

最後に、こうした目標に対する 2 つの交互作用、およびこれらの目標期待の影響性と未来に対する態度との交互作用を検討するために、Wilcox(1981)を参考に 5 ステップによる階層的重回帰分析を行い、それぞれの説明変数の寄与の有意性を検定した。YG 性格検査の各尺度を基準変数とし、道具性期待、遂行期待の順に説明変数を段階的に投入し、それらの交互作用として 2 尺度の得点の積(道具性期待×遂行期待)を投入した。さらに、Vroom の EIV 理論やそれに基づいた Van Calster, Lens, Nuttin(1987), Lens(1986)の一連の研究からは、未来の目標群の誘意性を反映する「未来に対する態度」の様相によって目標期待の影響性が異なることが推測される(杉山, 1995)ため、未来に対する態度の得点を投入し、最後に 3 つの説明変数の積(道具性期待×遂行期待×未来への態度)を 3 要因の交互作用として投入した(TABLE. 8-1 から TABLE. 8-4 まで)。その結果、劣等感の強さおよび抑うつ性に対してその交互作用が有意であり、詳しく検討するとこれらの要因が共に低い場合

TABLE. 8-1 YG 性格検査における階層的重回帰分析の結果(1)

|             | S 社会的外向           |                   | A 支配性             |                   | T 思考的外向           |                   |
|-------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
|             | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 |
| 目標道具性(A)    | .30               | .30**             | .20               | .20**             | .01               | .01               |
| 目標遂行期待(B)   | .33               | .03               | .25               | .05+              | .13               | .12**             |
| (A)×(B)     | .34               | .01               | .26               | .01               | .14               | .01               |
| 未来に対する態度(C) | .39               | .05*              | .29               | .03               | .19               | .05+              |
| (A)×(B)×(C) | .39               | .00               | .29               | .00               | .21               | .02               |

注) + p<.10, \*p<.05, \*\* p<.01

TABLE. 8-2 YG 性格検査における階層的重回帰分析の結果(2)

|             | R のんきさ            |                   | G 一般的活動性          |                   | Ag 愛想の悪さ          |                   |
|-------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
|             | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 |
| 目標道具性(A)    | .08               | .08*              | .21               | .21**             | .11               | .11*              |
| 目標遂行期待(B)   | .09               | .01               | .24               | .03               | .12               | .01               |
| (A)×(B)     | .10               | .01               | .34               | .10**             | .12               | .00               |
| 未来に対する態度(C) | .12               | .02               | .34               | .00               | .12               | .00               |
| (A)×(B)×(C) | .13               | .01               | .34               | .00               | .14               | .00               |

注) +  $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

TABLE. 8-3 YG 性格検査における階層的重回帰分析の結果(3)

|             | Co 非協動的           |                   | O 非客観性            |                   | N 神経質             |                   |
|-------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
|             | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 |
| 目標道具性(A)    | .15               | .15**             | .02               | .02               | .12               | .12*              |
| 目標遂行期待(B)   | .24               | .09*              | .04               | .02               | .20               | .08*              |
| (A)×(B)     | .24               | .00               | .12               | .08+              | .20               | .00               |
| 未来に対する態度(C) | .26               | .02               | .12               | .00               | .20               | .00               |
| (A)×(B)×(C) | .31               | .05+              | .12               | .00               | .23               | .03               |

注) +  $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

TABLE. 8-4 YG 性格検査における階層的重回帰分析の結果(4)

|             | I 劣等感強            |                   | C 回帰性傾向           |                   | D 抑うつ性            |                   |
|-------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
|             | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 | R <sup>2</sup> 累積 | R <sup>2</sup> 変化 |
| 目標道具性(A)    | .10               | .10*              | .001              | .001              | .08               | .08*              |
| 目標遂行期待(B)   | .20               | .10*              | .02               | .02               | .33               | .25**             |
| (A)×(B)     | .22               | .02               | .07               | .05+              | .37               | .04+              |
| 未来に対する態度(C) | .23               | .01               | .10               | .03               | .37               | .00               |
| (A)×(B)×(C) | .33               | .10*              | .11               | .01               | .46               | .09*              |

注) +  $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

にこれらの心理特性が最も高い平均値を示すということが確認された。

このように研究2においては、未来の目標への期待や未来に対する態度が適応の様々な側面と関連を持ち、特に目標に対する道具性期待と遂行期待を併せ持つ個人の各側面における適応性が高いことが確認された。こうした傾向は全体として杉山（1995）のモデルと一致するものであり、これらの要因と未来展望の行動調整効果との間の結びつきを示唆するものであったといえるであろう。今後は、さらに実験や縦断的調査によって、こうした関連の因果性について、より精密に検討していく必要がある。

### 引用文献

- Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton: Van Nostrand.
- Bandura, A. 1982 Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, 37, 122-147.
- Bandura, A. (重久剛訳) 1985 最近のバンデュラ理論 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊 (編) 1985 社会的学習理論の新展開 金子書房.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life cycle*. International University Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Gjesme, T. 1979 Future time orientation as a function of achievement motives, ability, delay of gratification, and sex. *Journal of Psychology*, 101, 173-188.
- 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 勝俣瑛史・篠原弘章・村上みどり 1982 非行少年の時間的展望 熊本大学教育学部紀要, 31, 267-277.
- Lens, W. 1986 Future time perspective : A cognitive-motivational concept. In Brown, D. R., & Veroff, J.(Eds.) *Frontiers of motivational psychol-*

- ogy. Berlin: Springer-Verlag, 173-190.
- 都筑学 1993 大学生における将来目標の内容と特質 日本心理学会第57回大会発表論文集, 481.
- 落合良行 1980 孤独感の内包的構造としての時間的展望に関する解析 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 204-205.
- Raynor, J. O. 1970 Relationship between achievement-related motives, future orientation and academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 28-33.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 杉山成 1993 統制感の剥奪が未来展望に及ぼす効果 時間的展望に関する社会心理学的研究 —時間的評価の関連要因についての検討— 立教大学文学研究科修士論文 (未公刊).
- 杉山成 1994 中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性 教育心理学研究, 42, 415-420.
- 杉山成 1995 青年期における未来展望と適応 —期待理論によるアプローチ—立教大学心理学科研究年報, 37, 65-75.
- 角野善司 1993 大学生の個人的目標(2) 日本教育心理学会第34回大会発表論文集, 187.
- Van Calster, K. V., Lens, W., & Nuttin, J. 1987 Affective attitude toward the personal future: Impact on motivation in high school boys. *American Journal of Psychology*, 100, 1-13.
- Vroom, V. H. 1964 *Work and Motivation*. John Wiley and Sons. (坂下昭宣他訳 1982 仕事とモチベーション 白桃書房)